

もうそろそろ、「自分たちで引き受けて考える地域」の構築を目指してはどうだろう。

●花房尚作（曾於市在住）

「地方創生」は、日本政府の最重要政策の一つになっている。地方自治体は「関係人口」「Iターン政策」「田園回帰」「ローカル思考」などの言葉を駆使し、発展地域から人びとを呼び込もうとしている。報道機関においても地域活性化の必要性を盛んに訴えている。その訴えの中心にあるのは、「地域の活性化は正しい」といった認識である。

しかし本当に「地域の活性化は正しい」のだろうか。活性化している地域は「好ましい地域」で、活性化していない地域は「好ましくない地域」なのだろうか。それは発展地域（主に都心）で暮らしている者たちの勝手な思い込みではないだろうか。

発展地域で暮らしている者たちは、ついつい都市と田舎の二つに分けて物事を捉えがちである。同じ田舎でも、埼玉県や千葉県の田舎と、鹿児島県の田舎では事情が違う。やはり過疎地域に住み込み、過疎地域の人びとと仕事をしてみないと得られない気づきがある。過疎地域の人びとと同じ空気感のなかで、過疎地域の人びとと同じ肌感覚を持つことで、見える景色が違ってくる。しかし、私は過疎

地域に住み込んで調査をしている研究者を見たことも、聞いたこともない。そのような研究の積み重ねが、現実とのズレを生み出しているのではないか。

私の調査によれば、過疎地域の人口流出の主な要因は、『①学問を求めて ②専門職を求めて ③自由を求めて』の三つである。過疎地域には、利便性に伴う学びの難しさがあり、単純労働に伴う労働環境の難しさがある。一昔前なら「都市で上手くいかなかったら田舎に戻って来い」と言えた。しかし現在は、両親の事業を継ぐなどの特別な事情がない限り、過疎地域に戻るの難しくなっている。そこには人口流入を拒む三つの壁がある。その三つの壁とは、『①利便性の壁 ②労働環境の壁 ③人間関係の壁』である。

地政学的に人が集まりやすい地域と、人が集まり難い地域が存在し、それぞれ異なる地域構造をつくっている。その地域構造とは、安らぎと気楽さを求める者と、発展と成長を求める者の住み分けであろう。安らぎと気楽さを求める者は過疎地域で暮らし、発展思考と成長志向持つ者は発展地域で暮らす。日本各地に過疎地域があるのは住み分けの構造に適応した結果である。その結果を政府の財政支援で覆そうとしているのが過疎地域の活性化である。その試みは尽く失敗してい

る。それにもかかわらず、どうして地域活性化事業を続けるのだろうか。

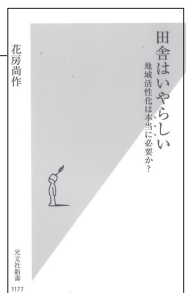
その理由は幾つか考えられる。その一つとして税金依存がある。過疎地域の市町村役場は、地方税などの独自の歳入だけでは自治体を維持できない。そのため、政府から地方交付税の名目で税金を受け取っている。さらに、国庫支出金や県支出金といった地方交付税とは別の税金も得ている。そのうえで、地域自立活性化交付金や地方創生推進交付金などの補助金が発生している。それらの税金は、国家公務員や地方公務員、そして補助金事業者の収入になる。つまり、地域活性化事業の本当の目的は、利権構造に基づく既得権益の維持にあるのではないか。

そこで提案したい。地域活性化事業は、地域の人びとのボランティア（遊び感覚）に委ねてみてはどうだろう。補助金は、ある一定の者だけが恩恵を得られる使い方は避け、誰もが恩恵を得られる使用価値（富）の高い事業に転換してはどうだろう。たとえば、医療従事者、介護従事者、食料生産者、運送や配送などの日常生活を支える職業への支援である。

また、どこの地域でも暮らせるよう、多極分散に耐えられる公共交通網を確保してはどうだろう。そのうえで、ここに来れ

ば必ずおにぎりが食べられるという、飢えと無縁の地域構造をつくったらどうだろう。さらに、誰もが横になって眠れる場所を確保できたら、じゅうぶん豊かで気楽な地域の誕生ではないだろうか。補助金の使用方法について、私たちは自分たちで引き受けて考え直す時期が来ているのではないだろうか。

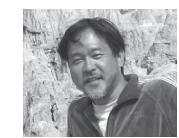
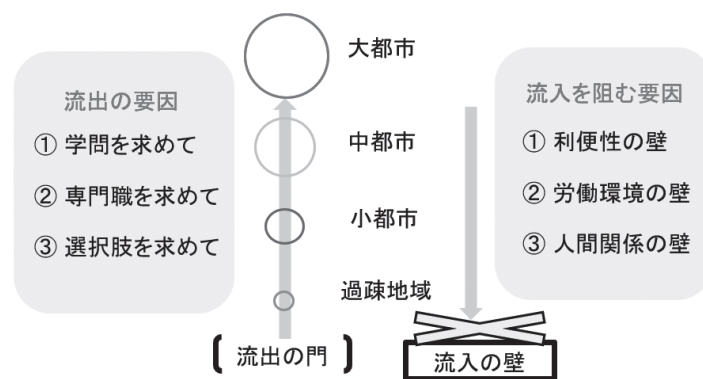
この本
オススメします



花房尚著作『田舎はいやらしい』（光文社新書）990円
「変わらないことを望む人びとの姿があった。何一つ変わることもなく、どこにも飛び立たず、廃れ、寂れ、衰えていくことを望む人びとの姿があった」（本文より）

ハチロクニュース購読者のみなさんは、役所の窓口や電話でたらい回された経験はありますか？公的な補助金獲得になんだか長けている個人や団体、そしてその理由とさらにそこを囲み支援するたくさんの方のご存在をご存知ですか。時には私たちもその1人?! 市政と相談業務のなり立ちと進行には日々謎が尽きません。タイトルだけで、この本がえぐる、あるいはさらすであろう大都市近郊ではない鹿児島県の過疎実情を思いました。実際読み進めれば毎秒直面している仕事と暮らしでの実感の痛みと悲しさを持って思い起こしました。今この時 自分が立つ地平からどうすればいいか、考えよう、行動しよう、と甘苦く元気が湧く魅力に満ちた力作です（野口英一郎）。

流出の門と流入の壁



花房尚作（はなふさ・しょうさく）
専門は、田舎（過疎地域）の研究と、価値観の多様性の研究。大隅半島の現実を伝えた著書「田舎はいやらしい（光文社新書）」で注目を浴びる。その他にも劇団主宰など多彩な活動分野を持つ。いろいろとやっていて、まとまりがないのが売り。連絡先：info@sho39.com